

平成 30年 3月 26日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人 日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201780057

氏 名

高橋 春人

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先 : 都市名 延吉 (国名 中国)
2. 研究課題名 (和文) : 朝鮮語延辺方言のテンス・アスペクトに関する研究
3. 派遣期間 : 平成 29年 10月 13日 ~ 平成 30年 3月 21日 (160日間)
4. 受入機関名・部局名 : 延辺大学
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況

派遣先では、テンス・アスペクトを中心に延辺朝鮮語の調査を行った。これは、当該方言の調査という方言学的な視点からだけでなく、方言学と言語の歴史的研究の関わりを念頭に置き、調査結果を報告者の取り組む朝鮮語史の研究に取り入れることを目的としたものである。以下に概要を述べる。

[調査地点と調査対象]

インフォーマントやその他の調査協力をお願いしたのは延辺朝鮮族自治州を中心とした朝鮮語母語話者の人々(朝鮮族)である。調査を行ったのは主に中国吉林省の延吉市であるが、その他に近郊の村や、長春、琿春、图们、和龍、龍井などといった諸都市においても実施した。また、琿春—ウラジオストクの長距離バスの車内などでもインフォーマントに会うことができた。

[調査の内容]

延辺朝鮮語のテンス・アスペクトと関わる形式として‘-dais-’ (転写は河野六郎式。以下同様。) という接辞を中心に調査したが、その他にも勧誘と関わる接辞‘-gi-’や疑問文に使用される‘-mda/symda’ (これは本来平叙文に用いられる形式である)などについての調査も行った。

[調査方法]

調査の方法としては、①観察、②口頭での聞き取り、③アンケートなどを用いた。

まず、①の観察であるが、実際に言語が使用されている場所へ出かけて行き、そこでの話者同士の会話を観察するものである。延吉市内においては大学(延辺大学)の他、市場、書店、病院、教会、結婚式場、葬儀場、空港、飲食店、美容室、駅、バスの車内、知人の自宅や職場などにおいて観察を行い、場面と例文を記録した。

②口頭での聞き取りは観察調査の過程で知り合うことのできた知人たちや、知人を通して紹介さ

れた人々のうち、特に反応の良いインフォーマントに依頼して実施し、例文と内省によるコメントを収集した。

③アンケートは②と同様に知人や知人に紹介してもらった人々に依頼し、内省によるコメントを収集した。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性

現在、前項で述べた調査の結果得られた例文(とその場面)や、聞き取り調査・アンケートで示された母語話者の回答の整理・分析を行っている。インフォーマントの年齢、性別の他に、出身地や言語的背景に関する情報も整理する必要がある。今後、調査の漏れなどが見つかった場合に備えて依頼しておいた現地のインフォーマントと、メールやメッセージなどを用いて連絡を取りつつ、必要に応じて追加の調査を行っていききたい。

発表に関しては、報告者にとってはまず博士論文を執筆することが課題である。その過程において可能であれば今回の調査結果のうち、論旨と関連のある情報を提示して合わせて論じていききたい。また、当該方言のテンス・アスペクト以外にも今回の調査を通して興味を持ったいくつかの形式について、調査を重ね発表していききたい。そのようにして将来的には方言も含めた包括的な視点からの朝鮮語史研究を目指していききたい。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと

本プログラムを通して、当該方言の実際に使用された状況の分かる生きた用例を収集し、有用な資料を得ることができた。これは言語が実際に日常生活で使用されている現地に赴くことができたからこそ可能となったものである。そのため、当初目標としていた言語形式以外にもさらにいくつかの形式についても調査を行うことができ、今後の研究のテーマとして追及していききたいと考えている。

また、報告者はこれまで主に文献資料を利用した研究に取り組んできた。そのため、インフォーマントを対象とした研究に携わることで、広い視野や異なる研究方法を学ぶ機会となった。例えば調査を行う場所の選定と関わる問題があるが、当初は調査地点として現地の大学や市場などを想定していたが、むしろ知人の美容室が調査に適していることが分かった。それは、調査を実際に行ってみたところ、多くの話者は外国人に話すときと、母語話者同士で会話するときでは異なる話し方をすることが分かったためである。報告者が直接インフォーマントと会話すると、多くの人は改まった話し方やいわゆる標準語に近い話し方をしようと努めるようになる。また、方言について程度の差はあっても恥ずかしがったり、標準語で話せないことに気後れしたり、研究するほどの価値のないものという態度を取ったりするようになる。そこで、報告者がインフォーマントと会話をしたり聞き取りをしたりするのではなく、母語話者同士が気楽に会話することができる環境に報告者が寄り添う形式で観察を行ったり、母語話者の調査協力者を仲介にして質問をしたりする方が良いと思われた。それに適した場所を探してみたところ、美容室では店員(知人)と客が多くの場合打ち解けた会話を交わすことが多く、他の客(報告者)が順番待ちをしながら会話に参加することも自然なことであるため、調査を行いやすいことが分かった。これはほんの一例であるが、実際に現地での調査に携わることで知ることのできた点であると言える。

このような研究に直接関わる点だけでなく、現地における人脈、人々の考え方や態度、延吉市延辺朝鮮族自治州の地理や交通に関しても知ることができたのは、今後の調査においても有用であろう。そもそも、当該方言のリスニングという基本的な問題に関しても、報告者が最も多く接してきたいわゆる標準語との違いのため、当初は聞き取れないことが多々あったが、本プログラムを通じて現地に滞在することで、多くの母語話者と交流し少しずつ改善することができた。

(最後になりましたが、調査や現地の生活でお世話になった方々や、延辺大学の先生方、指導教員の趙義成先生に感謝申し上げます。)